

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

「68年5月」から何が引き継がれたのか マルセル・ゴーシェの場合 — 『歴史的条件』（2003年）を読む —

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山, 尚之 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/414

「68年5月」から何が引き継がれたのか マルセル・ゴーシェの場合 — 『歴史的条件』(2003年)を読む —

小山 尚之*

(Accepted October 28, 2010)

What Has Been Inherited from the May 68 ? A Case of Marcel Gauchet — Reading of "La Condition Historique" —

Naoyuki KOYAMA*

Abstract: Marcel Gauchet is political philosopher in present age France. He describes in his book "La Condition Historique" what he has inherited from the May 68. For him, the thoughts of the May 68 appeared in the form of structuralism in linguistics, anthropology, psychoanalysis and history. The structuralist paradigm criticized the subjectivity of modern subject. From this intellectual structuralist movement, Gauchet glimpsed a possibility of unifying several disciplines capable of explaining generally about human being and society. Then, he would try to realize this possibility in form of his own "anthroposociology transcendental". But he regarded very sceptically a postmodernist death of subject derived from structuralist criticism and he was also critical to Marxist determinism. To get himself out of structuralist abstraction and economic determinism, Gauchet found Merleau-Ponty's phenomenology and Pierre Clastres's ethnology very efficient. But later, Gauchet would have his point of view which compensates a lack of temporality in phenomenology and would analyse religious functions as a social and political mechanism.

Key words: Marcel Gauchet, May 68, structuralism, subject, politics

1. はじめに

本稿は、フランスの政治哲学者マルセル・ゴーシェ Marcel Gauchet の『歴史的条件』 *La Condition Historique* (2003年)⁽¹⁾ についての紹介であり解説であることを最初に明記しておく。

M. ゴーシェに関してはすでに2つの邦訳が存在している。『代表制の政治哲学』 *La Révolution des pouvoirs* (原著 1995年、邦訳 2000年)⁽²⁾ と『民主主義と宗教』 *La Religion dans la démocratie* (原著 1998年、邦訳 2010年)⁽³⁾ である。また宇野重則著『政治哲学へ』(2004年)には、ゴーシェについての簡明で的確な紹介がなされている⁽⁴⁾。

ゴーシェについての詳細は、これらの本の訳者あとがきや解説を参照していただきたいのであるが、まったく未知の読者のために簡単にゴーシェを紹介しておこう。彼は1946年生まれ。サン・ローの師範学校を出て、中学校で教えたのち、クロード・ルフォール Claude Lefort のもとで D.E.S (今日の修士論文あるいは D.E.A に相当するもの) を取得。論文はフロイト Freud に関するものでタイトルは『フロイト：存在論的精神分析』 *Freud : une psychanalyse*

ontologique であった。『テクスチュール』 *Texture*、『リーブル』 *Libre* などの雑誌に参加。コルネリウス・カストリアデイス Cornelius Castoriadis、ピエール・クラストル Pierre Clastres らと交流。1980年、ピエール・ノラ Pierre Nora とともに雑誌『ル・デバ』 *Le Débat* を創刊。現在はその編集長。1990年から社会科学高等研究院のレイモン・アロン研究センターで講義も行っている。

ゴーシェの試みは、個人の内面的な精神構造と、全体的な社会の推移とを結合させた「民主主義の人間学」(宇野 2004) であるとひとまず言えるだろう。その際、「主体」、「批判」(あるいは反省性)、「歴史」という近代の鍵概念を、宗教からの分離としてではなく、宗教からの延長であり宗教を補足するものとして捉えながら、しかし宗教の他律性には最早頼ることのできない自律性の証しとして再検討する。これらの概念が練り上げられた当初は、その自律性に神学的な神の全能の観念が刻印されていたので、自己によるおのれ自身の透明な統御と理解が、未来において実現されると信じられていた(特にヘーゲルにおいて)。しかし近代社会が進むに従って、この自律性の内部には意識が到達できない不透明な異物が存在し、主体の内には分裂が孕ま

* Department of Marine Policy and Culture, Faculty of Marine Science, Tokyo University of Marine Science and Technology, 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科)

れていることが明らかになってきた。ゴーシェはこの事態を主体性の消滅と捉えるのではなく、むしろ主体性が深化した証しとして把握し直し、民主主義社会におけるさまざまな政治的分裂とパラレルな現象として検証する。このときゴーシェは、その分析を常に歴史的なパースペクティブの中に置き、軸となる事件に焦点を定め、その事件のコンテキストを参照することを決して忘れない。彼はよりよく哲学的な考察をするために歴史家となるのである。彼自身はみずからの試みを冗談めかしながら「超越論的人間社会学」anthroposociologie transcendante と名付けている⁽⁵⁾。全体として見ると、彼の仕事は、個人の内面的心理構造の顕微鏡的分析と、個人を社会的存在たらしめる政治的なものをめぐる望遠鏡的パースペクティブとを合致させたものであると言えるだろう。ゴーシェは、経済的な下部構造が政治などの上部構造を決定するというマルクス主義的ヴィジョンには批判的である。と同時に人間精神の活動における、矛盾と葛藤というものの構成的であると同時に乗り越え難い性格、分裂というものの還元し難い性格を、フロイト、ラカンをとおして採択している。そして宗教を、前・近代、反・近代な「民衆の阿片」として切り捨てるのではなく、個人を社会的存在たらしめ、社会を政治的に動かす装置として分析し、近代における宗教からの脱却と宗教的なもの名残りを歴史的に詳しく跡付けている。

ゴーシェについての紹介は以上のようなもので十分ではないかと思われる。

実を言えば筆者はゴーシェを専門に研究する者ではないし、また政治哲学、社会学などをとくに研究する者でもない。

それでは何故筆者は、ゴーシェの本『歴史的条件』に興味を持つようになったのか？

理由は単純である。筆者が定期購読している雑誌『ランフィニ』*L'Infini* (2004年夏第87号)に、マルセル・ゴーシェとフィリップ・ソレルス Philippe Sollers との、ゴーシェの著書『歴史的条件』をめぐる対談⁽⁶⁾が掲載されていたからである。筆者はこの対談を非常な興味を持って読んだ。たとえば以下のような箇所である。

Ph. ソレルス——あなたが68年についておっしゃっていることは、ジャーナリスチックな世論（これが今日われわれにとって諸悪の根源となっているわけです）にきわめて逆行するものですね。68年があらわした、知的、政治的な裂け目のことを思い出しながら、あなたはこう結論しています。「これは今日ひとが忘却している68年の一側面です」と。(中略)

M. ゴーシェ——(中略)。それは、みずからの過去、とりわけ生き生きとしているみずからの過去を、おのれにたいして説明することが不可能となっている国における、集団的抑圧の側面です⁽⁷⁾。

フランスにおいて、1968年の5月革命が何を意味していたかについて、現在、集団的な抑圧が存在するという、ゴーシェ発言は、筆者の興味を惹かずにはおかなかった。そしてゴーシェにとって「68年5月」は知的、政治的にどのようなものとして現れたのか、という点についても好奇心が湧いた。

また、68年前後のフランスの思想的沸騰の背後に、マルティン・ハイデガー Martin Heidegger の影を指摘している箇所も、同じく筆者の注意を引いた。

Ph. ソレルス——あなたは、興味深いやり方で、「構造主義」と呼ぶよう合意されているものの中での、ハイデガーの役割を浮かびあがらせています。あなたは言っています。「私が、フランス流のハイデガー主義と同定しているものは、そのようなものとしては現われませんでしたし、そのようなものとしては否定さえされました。それは、その根を隠しながら、哲学的にはオリジナルなものとして通り得たのです」。これは、もっとはっきりさせる必要があります。(中略)

M. ゴーシェ——(中略)。説明は比較的簡単です。ハイデガーは、フランスにおいて、人類学、言語学、精神分析、そして、ある世代の哲学者たちのまなざしの元で素描されつつあったそれらの学問の思弁的な延長が交差するところに、思いもかけない役どころを見出したのです⁽⁸⁾。

ハイデガーがどのような意味でフランス構造主義の中で役割を果たしているのか。これはゴーシェの本に実際あたってみないと詳しくは分からないであろう。そこで筆者はゴーシェの『歴史的条件』を読み始めたのである。

『歴史的条件』という本は、ゴーシェと、フランソワ・アズーヴィ François Azouvi、シルヴァン・ピロン Sylvain Piron とのあいだで交わされた対談から成り立っている。それはゴーシェ自身の知的経歴を跡付けるものであり、一種の精神的自伝となっている。

先にも述べたが、日本には既にゴーシェの翻訳がふたつ刊行されており、その思想の解説書も出されている。ここで筆者がゴーシェ思想の紹介を試みても、それは屋上屋を架す振る舞いと何ら変わらないであろう。しかし先に掲げたゴーシェ思想の解説・紹介には、「68年5月」をゴーシェは知的にどのように生きたのかについての記述がない。ところでソレルスとの対談でも触れられていたことだが、『歴史的条件』という本には、「68年5月」についての知的、政治的な分析、考察が豊富に盛り込まれているのである。

そこで本稿では、『歴史的条件』という本に寄り添いつつ、とくに「68年5月」の思想に焦点を合わせ、当時22歳ぐらいであったゴーシェは、「68年5月」の思想から何を汲み取

り、現在に至っているのかについて、またフランス構造主義におけるハイデガー思想の役割についても同時に紹介と解説を試みることにしたい。

2. 「68年5月」という母体

68年当時ゴージェは、ノルマンディー地方のカーンに住み、その近くの中学校で教えていた。5月革命が勃発した時、ゴージェはちょうど中学校におり、ラジオのニュースに衝撃をうける。彼はすぐさま職を放棄し、事が起こっている現場、パリへ向かう。そこで出会ったのは公共の場での発話の爆発であった。さまざまな場で集会がもたれ、議論がなされていた。

それから人々は話すだけでは満足せず、書き、謄写版を回し、ビラを貼り、パンフレットを配りました。私は数百キロもするパンフレット、マニフェスト、ビラを運ばねばなりませんでした。それらはパリと地方、それから都市と都市のあいだで交換されました⁹⁾。

ゴージェの立場は、反スターリンかつ極左的ポジションであったらしい(のちに彼は右旋回する)。68年5月の時ほど即興で多く書いたことはない、とゴージェは回想している。同時にその時は、埋もれていた、あるいは忘れられていた参考文献の一世帯が表面に浮上したときでもあった。サンシエでフランソワ・シャトレ François Châtelet が開催した、「人間科学の批判的大学のために」という講演に参加。決定的な大学改革が間近に迫っていると希望を膨らます(この、大学の学科編成やカリキュラムの、新しい学問のための改革の夢は、68年5月の忘れられている側面のひとつであるとゴージェは述べる。現在はそれについて、騒々しい暴力の記憶しか残っていないという)。そしてその後、クロード・ルフォールの指導の下に入る。

また68年5月、ゴージェは、後に恋愛関係におちいり、共同で執筆作業をすることになる伴侶(だが彼女は1993年に亡くなるのだが)、グラディス・スワン Gladys Swain と出会う。恋愛関係に入る前に相当言い合ったらしい。彼女は精神科医となるべく医学部での学業をおえていた。彼女は当時トロツキストで、第4インターナショナルの指導者の一人であった。のちに彼女は博士論文『狂気の主体』*Le Sujet de la folie* (1974年)において、ミシェル・フーコー Michel Foucault に反対する立場を表明することになるが、ゴージェがD.E.S.の論文テーマにフロイトを取り上げたのは、時代の趨勢であると同時に彼女の影響によるところが大きいであろう。

3. 「68年5月」の思想

ゴージェにとって「68年5月」はどのような知的運動と

なって現われたのか。それはいわゆる「構造主義」*structuralisme* というかたちをとって現出した。言語学における構造主義。クロード・レヴィ＝ストロース Claude Lévi-Strauss による構造人類学あるいは民族学。それにジャック・ラカン Jacques Lacan の精神分析が加わる。それらは、「言語」という要素を介しての、人間と社会に関するグローバルな理論によって、新たな科学の創成を期待させた。

言語学、民族学、精神分析が、たがいの敷居をこえて新たな人間科学として提示しようとした構造主義的パラダイムは、結局、「《それ》が語る」*Ça parle* という命題に帰着する。《それ》というのはフロイトの言う「エス」*Es* である。フロイトによれば、無意識とは、これこれのものであると同定できるものではなく、ある行為がなされたのち、事後的に《それ》としか言いようのない、実体化できない何かである。この「《それ》が語る」という命題は、思考の主体、語りの主体、行動の主体としてそれまで考えられてきた「近代的主体」の、自己関与性、自己統御性、自己の能動性を揺さぶるなにかである。私が主体的に思考し、話し、行動していると思いついていて、実は「それ」が、私の代わりに思考し、話し、行動しているのだと、構造主義は教える。ラカンは、言語の理論を精神分析に結合させ、主体にたいする言語の外在性を強調し、言語を創造するのは主体ではなく、言語が主体を創造すると転倒させた。また構造主義的民族学も、社会的機能の展開は、個々の人間の発意に基づくのではなく、親族の構造や婚姻の規則、あるいは交換の規則によって作動するものであることを教えた。またフーコーの言う「エピステーメー」*épistémè* という概念も、おのおのの時代における《それ》であると捉えることもできるかもしれない。各時代においてひとが真理を発話しようとするとき、真理は、発話する本人の意思に関わりなく、その時代の《それ》、つまり「エピステーメー」に規定され、拘束されているのである。「68年5月」における構造主義とは、「近代的主体」の主体性を批判する思想であったと要約し得るであろう。構造主義は、素朴に主体のものであるとされてきた意味や価値を、外在化し、脱中心化する。これにデリダの、プラトン Platon 以来のロゴス中心主義を脱構築する思想が加わり、ルイ・アルチュセール Louis Althusser の「認識論的切斷」*coupe épistémologique* によるマルクスの読み変え、すなわちマルクスはみずから意識していまあるマルクスになったのではなく、マルクス自身それと知らずしてマルクスのなかでエピステーメーが変化した結果、マルクスはいまあるマルクスになった、という読みが加わるわけである。

ところでゴージェによれば、このような「68年5月」の思想の背後に、ハイデガーの大きな影響が存在する。フランスでは戦後、ジャン・ボーフレ Jean Beaufret を介してハイデガーが紹介されていたが、ゴージェのみるところ、ハイデガーの『ニーチェ』(1936年から40年にかけて行われた講義録。1961年刊行)と『ヒューマニズムについての書

簡』(1947年)が、地下水脈的な影響をフランス思想に与えている。ハイデガーの実際のテキストを読む読まないに関わりなく、「ハイデガー効果」ともいべきものがフランス知識人たちのあいだに浸透していた、とゴーシェは言う。

しかし確かに、言葉の正確な意味における構造主義的パラダイムが存在しました。それを「批判的パラダイム」と呼ぶこともできます。このパラダイムは、ハイデガー、あるいは少なくともフランス流にアレンジされたハイデガーという力強い哲学的な補強から、なんでも意のままにする力を引き出しています。簡単に要約しますと、このパラダイムは、言語を人間の根本的な現象とみなし、語るのは言語であり、それを用いる個人ではない、という考察を付け加えます。存在の名におけるハイデガー流の主体性批判は、この構造主義的パラダイムにおいて、意味ある構造(たとえそれがどのようなものであれ)の名における主体性批判となっていたのです。ハイデガーの主体性批判は、とてつもなく魅力的な停泊地を構造主義の企てに提供していたのです⁽¹⁰⁾。

「言葉は存在の住み処である」というハイデガーの存在論は、実体的な存在者の客観的・主観的主体性を否定するものであり、プラトン以来の哲学的営みを「存在の忘却」として批判し、主観・客観の分割の生じる以前の存在の地平へと赴こうとする「反・哲学」であった。この存在論がフランスにおいて構造主義の主体性批判と出会った、というわけである。

またゴーシェによれば、この「68年5月」の思想は、単に知的な運動としてあっただけでなく、政治的な射程を孕んだものとして機能した。構造主義と政治をつなぐものの名の筆頭にアルチュセールがくる(ゴーシェ自身はアルチュセールに免疫を持ち、共産党にいかなる愛も持ち合わせていなかった)。アルチュセール派は、抽象的な理論と政治的な実践の融合を、「批判」という形態で行えると夢みていた。さらに、民族学者として、赤道下の原生林のなかの部族を現地調査することは、文明を自称する宗主国の残酷さと傲慢さを告発することにつながった。精神分析は政治的には保守的なようにみえるが、フロイトにもラカンにも両義性があり、たとえばフロイトの『文化における居心地悪さ』*Malaise dans la culture* (1930年)にはブルジョワ的偽善への批判がはっきり読みとれる。またゴーシェのみるところ、ルフォールのもちいる「分裂」*division* という概念は、おそらく、ラカンの『エクリ』*Ecrits* (1966年)の中の、「科学と真理」*La science et la vérité* という論文における「構成的分裂」*division constituante* からきている⁽¹¹⁾。これはルフォールにおいて、社会内部における対立を説明する概念となっているものである。加えて、当時の精神病院病棟における患者の扱い方には、社会的な批判が向けられてい

た。また言語に関しては、「テル・ケル」*Tel quel* グループによる言語の実験などがあり、それは、政治的にはブルジョワ文化からの解放運動となった。

「言語」についての新たな知見をもとに、人間の精神的内部、人間社会、政治、これらの全般にわたる新しい科学、つまりさまざまな学科の融合が、創成されつつあると、ゴーシェのような若者たちに映った「68年5月」の運動は、しかしながら、急速に凋落し、失望の体験へと変貌していく。

4. 「68年5月」思想の凋落

「68年5月」の思想は、諸科学の融合へむけて、さまざまなプログラムを提示した。だが融合は起こらず、プログラムの実現も早急にできるものではなかった。そのことを実証する典型的な例がフーコーの『言葉と物』*Les mots et les choses* (1966年)だそうである。この本は多大な影響をおよぼし、多くのひとを国立図書館へ赴かしめ、そこにおいて忘れられていた著者やもっともバロックな人物を漁らしめた。しかし結局、「絶対に真似のできないフーコー・タッチ」*une touche Foucault absolument inimitable* というものがあって、誰も「知の考古学」*archéologie du savoir* を即座には実践できなかった⁽¹²⁾という。デリダの脱構築もある種の単調さに陥った。西洋哲学はロゴス中心主義に支配されている。おそらくそれは真実である。しかしその証明を何度繰り返したところで、聖トマスやデカルト、ヘーゲルなどをよりよく理解することを可能にしない。言語学は、構造主義的言語学の流行が過ぎると、もとの専門性へ戻ってしまった。文学批評においては、主体性にたいする哲学による批判的命題が、「テキストはテキスト自身についてしか語らない」*Le texte ne parle que de lui-même* という命題に翻訳され、そのことについての数限りない証明がなされる。68年から2,3年のあいだに爆発的に文学におけるテキスト研究が公にされるが、しかしやがてそれは挫折の感情を産む。

68年世代の理論にたいする二日酔いは、この備給に見合ったものだったのです。これは、人文学の危機と呼ばれているものの出発点であり、下に隠れた要因です。這っていきようなゆっくりとした危機です。なぜなら構造主義的批判のパラダイムは、それ自身としては真に問題に付され、批判されることがなかったからです。このパラダイムは衰退し、流行遅れとなりました。しかしそれは、アカデミックなシステムの不活性によって、長い間しかるべき場に留まっていた。最も器用な人間、たとえばブルデュー *Bourdieu* のようなひとは、このパラダイムを調整するすべを心得ていました。伝統的なやり方が、少しづつ、再び優勢になりました。しかしこのパラダイムの挫折から、開かれた、公の、熟慮されたやり方での結論が引き出されてはきませんでした。そこから現在の凋落の雰囲気がきてい

るのです。人文学と社会学の、長引いている知的な停滞は、大部分、この検証の拒否に起因すると私には思われます⁽¹³⁾。

政治的には、「68年5月」以降、レーニン主義、共産党、トロツキズム、毛沢東主義などが、表面に湧出してくる。経済的な下部構造を奪取すれば、おのずと社会の変革は成るというわけである。ゴーシェにとってこのような状況は、少なくとも選択を鮮明にしなければならないものとして迫って来た。彼は、儀式的な「ブルジョワ」弾劾からはこれを限りと脱け出し、同時にマルクス主義的な思考回路からもとびだす。彼は、マルクス主義が解明し残した所与（歴史、階級闘争）を統合しながらも、マルクス主義的な、経済的下部構造が社会を規定するといった理論ではない政治理論を、ルフォール、カストリアディスらのもとで練り上げようと考えはじめる。そしてルフォールとともに、政治こそが社会を形成する下部構造であると考えようになる⁽¹⁴⁾。また、当時の、監獄を思わせる精神病院内で行われていることに対しては、ゴーシェもスワンも、世の趨勢と歩を同じくして批判の声をあげていたが、しかしだからといって、一部の精神病院解放論者が主張する、「狂気は存在しない」だとか、「狂気はブルジョワが排除したいと思っている連中を格子の後ろに隔離するための方便にすぎない」といった言説には与しなかった。とくに、精神科医として臨床の経験のあるスワンにとって、狂気は厳然と存在したのである⁽¹⁵⁾。

「68年5月」の理論的な構造主義は、近代的主体の主体性を批判するものとして起爆剤のような役割を果たしたが、そこから派生する「主体の死」をめぐるポスト・モダン的な言説には、ゴーシェは懐疑的となる。彼はその後、主体の歴史を一神教の誕生からもういちどたどり直し、フロイトにおいてそれがどのように機能しているかを再確認する方向を選択するのである。

あなたの定義なざる、主体であるという様態は、おのれにたいする透明性と理性的な統御を備えているものとしての主体という考え方（懐疑の哲学はその死を宣告しましたが）とは正反対の位置にありますね。

それゆえまさにフロイトから出発することが説得的だと思われたのです。意識的であると想定された主体を格下げすることを含めて、主体についての思想の展開が最もよく読み取れるのは彼においてです。この格下げを、主体の観念そのものの一掃と捉えるのは単純すぎます。現実には、この格下げは、主体の観念の深化の一段階に呼応しているのです。懐疑の哲学はこの点について完全に道を誤りました。この哲学は、主体におけるおのれ自身にたいする透明性を蒙昧に信じる代わりに、主体は存在しないという科学を代置するの

だと主張することによって、畏に陥りました。論戦的にはそのような見かたも魅力的です。しかし近視眼的です。主体の観念は、おのれにたいする全的な現前を告発する後にも生き残るだけでなく、その告発によって理解においてはさらに得るところが多いからです⁽¹⁶⁾。

ゴーシェは、フロイトの精神分析 *psychanalyse* を、フィリップ・ピネル Philippe Pinel、ジャン＝エチエンヌ・ドミニク・エスキロール Jean-Etienne Dominique Esquirol、ジャン＝マルタン・シャルコー Jean-Martin Charcot と続く、精神医学 *psychiatrie* の歴史と展開のなかにもういちど位置づけ直すと同時に、当時の医学におけるクロード・ベルナル Claude Bernard らの言説とも突き合わせることで、フロイトの精神分析は19世紀初頭以来の精神医学や医学の言説を継承・発展させたものと捉えかえす⁽¹⁷⁾。

またゴーシェは、主体という観念は、超越的な一者としてのユダヤ教の神と、物理的世界のロゴスを探求するギリシア的思考とが、神のこの世における具肉という形で、キリスト教の中で出会ったときに成立したと推論し、主体の歴史は、西洋社会がキリスト教という宗教から脱却していく度合いに応じて前面に出てきたものだとするようになる⁽¹⁸⁾。

5. ゴーシェにおいて「68年5月」から受け継がれているもの

「68年5月」の思想が、構造主義という形のもとの、近代的主体の主体性にたいする批判であったとしても、その後の展開における「主体の死」に関わる言説に、ゴーシェは距離をおくようになる。また、マルクス主義的な、経済的下部構造による決定論にも与しなくなる。さらに、狂気は存在しない、といった言説にも批判的となったことは、すでに述べた。

しかしながらゴーシェは、「68年5月」の思想が垣間みせた、言語学、民族学、精神分析を統合した、人間と社会に関する、グローバルな、新しい学問へのインスピレーションだけは、その後もずっと保持し続け、現在に至っていると述べている。

そうは言っても、私はあのとき（「68年5月」）に極めて恩義を負っています。また私は、ずっとあのときに忠実であり続けているという気がします。すぐさま「68年5月」に関しては批判的にはなりませんが⁽¹⁹⁾。

ゴーシェ自身の「超越論的人間社会学」の構想は、「68年5月」が約束したかにみえた、諸学科を統合した全体的な一般理論の構想にその根を持っていることは間違いないであろう。

しかしゴーシェは、当時の構造主義の、同語反復的な、現実との関わりのない抽象的構造を回避するため、師範学校時代から愛読していたモーリス・メルロー＝ポンティ *Maurice Merleau-Ponty* の現象学に脱出路を見出す。知覚の体験についての詳細で豊かな記述から出発して、一般的な哲学を構築するメルロー＝ポンティのやりかたに共感を覚えたゴーシェは、現象学的描写を出発点にすることを第一の要件とするようになる⁽²⁰⁾。

実は構造主義も現象学も、細部に注意を払うという共通の特徴を持っている。しかし細部の描写だけに終始すれば、それはある種の無時間的な袋小路におちいる。そこで、細部の描写を歴史的文脈のなかに挿入する必要性が生じて来る⁽²¹⁾。

一方で歴史に関しては、フーコーがすでに、「エピステーメ」という形での歴史の不連続性を明らかにしていた。しかしこの「エピステーメ」には、特異単独的な個人の思考を、時代の言説の一般文法のなかに溶解してしまうという不都合もあった。

ゴーシェは、自己に関する現象学的な、最も直接的で、最も社会性のない描写を、集団に関する政治哲学や社会分析に合致させ、それらを、各時代の「エピステーメ」を形成する軸となる歴史的な事件のパースペクティブのなかに文脈づけることを、構想するようになる⁽²²⁾。

6. 民族学の教訓

ゴーシェにとって、構造主義、マルクス主義から脱却するためのモデルを、この上無く明瞭に提供してくれたのが民族学であった。とくにゴーシェの「知的生活において最大のショックのひとつ」を与えたのが、ピエール・クラストルの論文「交換と権力。アメリカ・インディアンの族長体制の哲学」*Echange et pouvoir. Philosophie de la chefferie indienne* (1962年)であった⁽²³⁾。

クラストルの論文は、主として南アメリカ・インディアンの社会において、権力の中和化のメカニズムがいかんにか作動しているかを明るみに出すものである。アメリカ・インディアンの族長たちには大きな威光と権威が与えられており、彼らは紛争を仲裁し、ことあるごとに参照される神話の言葉、究極の正当化のための言葉を発する役目を引き受けている。にもかかわらず彼らは法を制定せず、命令を下しもしない。戦闘になれば戦いの長が族長に取って代わる。だが戦いの長の権限も抑制されている。敵対関係が終了すると戦いの長の権限は無くなり、彼らはもとの地位に戻る。

クラストルはこれを、内部から権力の拡張に抗するために組織されたシステムと考え、「国家に抗する社会」*société contre l'Etat* と呼んだ。国家とは権力や権限がある一極に集中しているシステムである。それに対して、アメリカ・インディアンにおける集団的組織の機能の仕方は、命令する権力がひとつのところに結晶化するのを防ぐように配慮さ

れている。クラストルはこの配慮を「社会学的な行為」*acte sociologique* と形容する⁽²⁴⁾。そして、何故アメリカ・インディアンにおいてこのような配慮がなされているのかは、マルクス主義的な、経済的生産の下部構造や階級闘争からは説明できない、とした。

ゴーシェは、この配慮を、ある集団における政治的な「決断」*Décision* と読み替える。ただし通常の意味における「決断」ではなく、ハイデガー的な意味における「決断」である⁽²⁵⁾。客観的な、断固とした、主意的な「決断」ではなく、存在のレベルにおける、決然とした形ではなされない「決断」である。いかなるプランにも従わず、決断する者がいないまま決断される、思いもかけない「決断」である。無意識的な選択と言い換えてもいいだろう。またこのハイデガー的「決断」は、フーコーの言う歴史の不連続性を説明するのにも有効である。ゴーシェは、このような政治的決断こそが人間集団の構造と方向性を規定するのだと考えるようになる。ゴーシェは、「68年5月」の思想を裏から支えていたハイデガーには批判的になっていくが、この存在のレベルによる「決断」という発想は非常に有効なものであると後まで保持し、やがてそれはゴーシェにおいて政治的に機能する宗教という概念に発展していく。

彼（ピエール・クラストルのこと）が浮かび上がらせる、権力の中和化は、それ自体の内部からは理解できません。この問題を宗教という角度のもとで捉えれば、視野が広がり、行き止まりの外へ出られます。（中略）この未開社会はそれぞれ異なっていますが、ひとつの同じ存在様式に従属しています。ところで歴史を通して様々な存在様式があります。政治的なものとは、ひとつの共同体にその存在様式を決定することを可能にし、表向きには意識的で決然としたものではないやり方で、共同体の実存を支える根源的なこれらのメカニズムのことです。人間社会は政治的社会です。何故なら人間社会は自然な状態によって決定されているのではなく、ある反省性によって住みつかれている社会だからであり、その反省性の歴史における根本的なあらわれが、宗教、なにかんづくその制度化だったのです⁽²⁶⁾。

7. 結び

かねてから構造主義に向けられていた批判、それは歴史性の欠如である。現象学に対しても、弁証法的な時間性を批判的なものとして対置し得るだろう。ゴーシェの試みは、構造主義的批判のパラダイムを根本的なところで受け継ぎながらも、その歴史性の欠如を補おうとするものであると言えるのではなかろうか。また、構造主義的批判のパラダイムが標的とした、近代的主体の主体性にたいする批判は、その後ポスト・モダンの思想としてもはやされるように

なるが、ゴーシェは早くから、そのような流れとは一線を画していたことはこれまで述べてきたとおりである。ゴーシェは、ハイデガーを隠れた源泉としながら近代的主体の吊鐘を鳴らすだけの側には加わず、むしろもう一度主体の歴史を問い直す方へ赴くのである。さらに「68年5月」の思想がもたらした、「《それ》が語る」という命題の真実は認めつつも、ゴーシェはそのレベルに留まり続けるのではなく、主体における《それ》、政治における《それ》、歴史における《それ》に、可能な限り理性的に肉薄しようとしているとも言えるのかもしれない。その際、宗教が果たしている無意識的で政治的な役割に新たな照明が当てられることになるのである。

筆者は政治哲学を専門にする者ではないし、ゴーシェを集中的に読んできた者ではないため、これ以上踏み込んだ議論は筆者の手に余るところである。ただ「68年5月」当時、20歳前後であったであろう世代が、いま現在、「68年5月」から何を引き継ぎ、何を批判し、どのような思想を形成しているかに興味があったために、本稿をしたための次第である。「68年5月」についてはいまだフランスにおいても評価は定まっていない。肯定的評価もあれば否定的評価もある。ゴーシェによれば、フランスではその記憶にたいする集団的抑圧が存在しているため、「68年5月」を全体的に俯瞰した決定的な記述はまだなされていないという。従って本稿で辿った「68年5月」の知的軌道は、あくまでゴーシェというひとつの知性を通してのものであり、一般化できるものではない。しかし「68年5月」の思想を否認せず（抑圧せず）、その功罪を深く考察し、現在に至っている知識人がいるという事実に、筆者は素朴に感心しているだけである。

加えてゴーシェの語りは、筆者のなかで長い間もやもやとし続けていたものを、明確にするという功德があった。つまり筆者のうちにおいて断片的に蓄積されバラバラになっていた知識を、関連付け系統立ててくれたのである。また本稿では深く取り上げることができなかったが、彼は、ある種の左翼的心性にとってはアレルギーとなっている宗教についても果敢に取り組み、宗教のもつ政治性や人間の精神構造におよぼす効果について深く解明している。それは筆者に新鮮な驚きを与えた。

ゴーシェの『歴史的條件』という書物は、「68年5月」から現在に至る展開をゴーシェの個人的で知的な経歴をとおして見通すものである。しかし本稿ではゴーシェにおける「68年5月」の思想の批判と継承に焦点を定めたため、『歴史的條件』のなかで豊富に語られているゴーシェ思想のその後のさまざまな形の発展をフォローすることはできなかった。ではあるが、最後にゴーシェが現代のフランスにおける政治についてどのような考えを持っているかを紹介して、終わることにしたい。

ゴーシェによれば、現代の状況において顕著なのは、個人の特異単独性 *singularité* と諸権利 *droits* の擁護と顕揚が、

至上の価値として持ち上げられすぎているあまり、個人と社会との絆が希薄となり、政治的なものが見えにくくなっている、ということである⁽²⁷⁾。今日における政治とは個人の特異単独性と諸権利を擁護し要求するための闘いである、という考えもあるであろう。無論個人の固有性や諸権利を守ることは重要なことである。しかしゴーシェは、それは政治的なものを発動させるものではない、と考える。ゴーシェによれば、政治的なものとは個人を集団として動員し、社会的なものに向かわせるものであり、過去と未来を俯瞰しながらどのような方向に社会を向かわせるべきか問うものなのである。しかしかつて個人を社会に結びつけていた宗教が、16世紀以来の脱宗教化の運動によって背後に退き、宗教の代わりに登場した近代国家の存在意義も希薄になりつつある今、どのような形で個人を政治的に動員すればいいのかが分かりにくくなってきている。今日の社会は、みずからを反省し、みずからを方向づけ、みずからを統御する能力に欠けている。その結果、社会的、文化的な再生産が危機に瀕している、とゴーシェは言う。だが希望がないわけではない。

しかし現在の停滞を最終的で乗り越え難い局面に変えてしまわないよう注意しましょう。現在は未来の規範でないばかりでなく、今のこの壊死状態に還元されるものでもありません。私は、きわめて多様な場において出現している人目につかない議論の沸騰や、そこで行われている省察の民主主義的な質に打たれております。私が言いたいのは多元主義の同化であり、党派的な偏狭さの乗り越えです。きわめて普通の人々が、反対の意見を表明する者にたいして、真剣に対話への配慮や、その言い分を認める能力を示していることに何度も私は驚かされました。あなたがどこへ行かれても、農業従事者、教員、企業の管理職、国鉄職員、中小企業経営者たちが、自分たちの領域における問題を、明晰に、冷静に、無私無欲に提示する場に出会うことでしょう。そのような事例は公の討論では稀にしか見ることがありません。この観点から見ると、レベルは異論の余地なく上がっていますし、政治家たちは教訓をここから受け取るべきです。（中略）。確かにこれらの潜勢力はすべて少数派ですし、ばらばらです。しかしいつの日か、これらの潜勢力が一体となり、公共の場の中心で、意義のある、それどころか決定的な影響力を、獲得するであろうと、想像することを妨げるものは何もありません⁽²⁸⁾。

ゴーシェの著書『歴史的條件』は2003年に出版されたものである。ところでその3年後、2006年の1月から3月にかけて、フランスではCPE（*Contrat Première Embauche* 「初期雇用契約」正雇用までの2年の研修期間、雇用者は理由なく被雇用者を解雇できるとするもの）に反対する、労働

組合、学生組合が連合した大規模な運動があった。その運動の未曾有の規模と広がりのため、国会で裁可された CPE 法案は、結局他の法案によって置き換えられた。ゴーシェの想像は一部この運動の中で実現したのではなかろうか。

註

- 1) Marcel Gauchet, *La condition historique, Entretiens avec François Azouvi et Sylvain Piron*, Stock, 2003, p.354.
- 2) マルセル・ゴーシェ、『代表制の政治哲学』*La Révolution des pouvoirs, la souveraineté, le peuple et la représentation* (原著 1995 年)、富永茂樹、北垣徹、前川真行、共訳、みすず書房、2000 年。
- 3) マルセル・ゴーシェ、『民主主義と宗教』*La Religion dans la démocratie* (原著 1998 年)、伊達聖伸、藤田尚志、共訳、トランスビュー、2010 年。
- 4) 宇野重規、『政治哲学へ 現代フランスとの対話』、東京大学出版会、2004 年、pp.88 ~ 102, pp.136 ~ 139 を参照せよ。
- 5) M. Gauchet, *La condition historique*, éd. citée, p.59.
- 6) *L'Infini*, été 2004, n°87, Gallimard, 《Sur la condition historique》, Entretiens entre Philippe Sollers et Marcel Gauchet, pp.8 ~ 19.
- 7) *ibid.*, pp.8 ~ 9.
- 8) *ibid.*, pp.10 ~ 11.
- 9) M. Gauchet, *La condition historique*, éd. citée, p.30.
- 10) *ibid.*, p.34.
- 11) *ibid.*, p.174.
- 12) *ibid.*, pp.43 ~ 44.
- 13) *ibid.*, pp.45 ~ 46.
- 14) *ibid.*, pp.47 ~ 48.
- 15) *ibid.*, pp.179 ~ 181.
- 16) *ibid.*, p.205.
- 17) *ibid.*, pp.182 ~ 184.
- 18) *ibid.*, pp.224 ~ 225.
- 19) *ibid.*, p.47.
- 20) *ibid.*, p.50.
- 21) *ibid.*, pp.52 ~ 53.
- 22) *ibid.*, p.55.
- 23) *ibid.*, p.64.
- 24) *ibid.*, p.65.
- 25) *ibid.*, pp.66 ~ 67.
- 26) *ibid.*, pp.75 ~ 76.
- 27) *ibid.*, p.329.
- 28) *ibid.*, p.346.

「68年5月」から何が引き継がれたのか マルセル・ゴーシェの場合 ——『歴史的條件』(2003年)を読む——

小山 尚之

(東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科)

要旨： マルセル・ゴーシェは現代フランスの政治哲学者である。彼はその著『歴史的條件』において「68年5月」から何を受け継いでいるかを語っている。彼にとって「68年5月」の思想とは、言語学、人類学、精神分析、歴史における構造主義という形であらわれた。構造主義的パラダイムは近代的主体の主体性を批判していた。ゴーシェはこの構造主義の知的運動から、人間と社会の条件について一般的な説明を可能にする、諸学科の統合の可能性を垣間見た。彼はそれを「超越論的人類社会学」という形で実現しようと試みることになる。しかし彼は構造主義批評から派生したポストモダン的な主体の死には懐疑的であり、またマルクス主義の決定論にも批判的であった。彼は、構造主義の抽象性と経済決定論から脱け出すにはメルロー＝ポンティの現象学とピエール・クラストルの民族学が有効であると見做した。しかしその後ゴーシェは、現象学に欠けている歴史性を補う独自の視座を獲得し、宗教の機能を社会的、政治的メカニズムとして分析するようになる。

キーワード： マルセル・ゴーシェ, 68年5月, 構造主義, 主体, 政治